



写真提供：南沢地区青少年育成委員会

## 笑顔の溢れる「ニュースポーツ」

～大人も子どもも、一緒にやってみました



小学校の体育館で、直径122センチ、重さ約1kgのピンク色のボールが宙に舞う。小学生に大人も交ざり、12人で打ち上げ、追いかける。まるで運動会で見ると大玉を飛ばしているようでもある。3チームに分

かれ、子供たちは自分より遥かに大きなボールを地面に落とさないように必死に追いかけている。歓声の中で行われた、キンボールと言う「ニュースポーツ」だ。

ニュースポーツとは、勝敗にこだわら

ず、気軽に誰にでも楽しめることを目的としたスポーツのことで、プレイヤーの年齢、体力、技術などを考慮し考え出された新しいスポーツ。パークゴルフやゲートボールもニュースポーツの一種と言える。

このニュースポーツ、実は南区役所が地域で活動する町内会や子ども会等の団体等に貸し出していて、キンボールの他、囲碁ボール、ミニテニス、フロアカーリング、スポーツチャンバラ、新十扇(しんとうせん)といったものがある。(※文末参照)

冒頭のキンボールの他、ミニテニスも体験させてもらった。ラケットが短く、ボールが軽く軟らかい。必ずワンバウンドをした球を返さないといけないため、怪我をする危険が少ない。しかし、プレーをしてみるとこれが意外に難しい。ボールが軟らかいから弾まないのだ。最初は感覚がつかめない子が多くいたため、あまりラリーも続かない。「うわー、ヤバイ!」「難しい!」。そんな声が聞こえていたが、終わる頃には小学生と大人と一緒に試合ができるようになっていた。練習時間が終わり感想を尋ねると、「またやりたい」、「コミュニケーションをとりながらできる」、「たくさんの人とできる」といった声が多かった。

後日、今度は南の沢小でニュースポーツの大きなイベントがあるという情報を聞き、行って来た。これは南沢地区青少年育成委員会と、南沢地区子ども会育成連絡協議会が企画した「集まれ!みんなで遊ぼうよ」と題した誰でも参加できるイベントだ。今回の種目は、囲碁ボール、フロアカーリング、スポーツチャンバラ、スリッポン。幼児から高齢者まで実に幅広い年代の105名が参加した。今回は、正式なルールではなく、対象者に合わせて多

少変更を加えたそうだが、大人も子どもも全く同じルールでプレーをしている。

フロアカーリングを実際に体験してみた。氷上のカーリングを普通の床でできるようにしたものだ。ストーンと呼ばれる用具を真っ直ぐ、丸い線の内側に入れればいいのだが、これが真っ直ぐ進まない。結局3回投げて辛うじて入ったのは1回だけだった。

まだまだニュースポーツの認知度は低いのが現状だ。今回ニュースポーツを体験した子供たちは初めてプレーした子ばかりだったが、大人と一緒に楽しむことができた。ルールが簡単で激しく動き回ることがないニュースポーツは新感覚のスポーツと言えるだろう。

是非一度、体験してみたいと言う団体は、南区役所の地域振興課(582-2400、地域活動担当)へ問い合わせを。

(文・写真:中谷侑樹)■

※南区役所が貸出しているニュースポーツ  
**新十扇**: 的に当たるように扇を投げ、得点を競う。

**囲碁ボール**: 碁盤に見立てたマットをめがけ白と黒のボールを打ち、並べ方で得点を競う。

**フロアカーリング**: 氷がなくてもできるカーリング

**キンボール**: 大きなボールを使い3チームでプレーし、得点を競う。

**スポーツチャンバラ**: 空気の入った剣と、防具をつけて行う。チャンバラごっこが原点。国際大会もある。

**ミニテニス**: 専用の短いラケットと軽いボールで、スペースを取らない。



## だれもが集える「むくどりホーム」

～バリアフリーの「藤野むくどり公園」も

石山通りを定山溪方面に向かう途中、藤野の閑静な住宅街の中にある普通の家。ここでは、障がいのある人もない人も、赤ちゃんからお年寄りまで誰もが気軽に立ち寄ることができる場所、「むくどりホーム」である。

玄関の扉を開けると、壁一面の靴置きに、びっしりと靴が並んでいる。玄関にも子供や大人の靴がたくさんある。部屋に上がると、多くの人々の笑い声が聞こえてくる。訪れた当日は、4人の子供たちとボランティアさんが和室で演奏会をしていた。鉄琴、太鼓、ハンドベルと好きな楽器を担当し楽しんでいる。

ここは今から15年前に、代表者である柴川明子さんが中心となり立ち上げた。現在までずっと無料で開放され、ホームの向かいにあるバリアフリーの藤野むくどり公園とともに、多くの市民の憩いの場にもなっている。

柴川さんがこのような施設を立ち上げたいと思った大きなきっかけは、東洋英和女学院短期大学保育科を卒業した後、東京教育大学特設教員養成部で盲教育を専攻していた時だ。在学中に実習で行った盲学校で幼児・親と出会い、生徒たちが

普通学級の子供たちと関わりがなく、家に帰ると友だちがいないことを知ったことだ。

その後は自身の結婚や育児によって、楽しくPTA活動などをしてきたが、これが、最終的にやりたかったことではないという思いがあった。そして50歳になり再び学びたいと思い、北星学園大学社会福祉学科に編入し、卒業後筑波大学大学院で障がい児教育について再び学び始めたのだ。その後大学院修了後の1992年には、札幌で視覚障がい児・者への理解と支援をテーマとした「ひかり女性学級」を主催し、その2ヶ月後には視覚障がい児親子相談ルームを開設し活動しだした。

そして同年秋、研修旅行で訪れたカナダで、訪問した子育て家庭支援センターから強い印象を受けた。自分が理想としている施設に近いものと感じ、「この形でいこう」と思ったという。そして1995年に当初自宅だった場所を改修・開放し、「むくどりホーム」ができた。

そして「むくどりホーム」と真向かいにあるのが「藤野むくどり公園」だ。以前は近所の川沿いにあったこの公園だが、14年前に河川工事のため今の場所に移動し

たため、まだまだ新しい。実はこの公園の土地は元々柴川さん夫婦が所有する土地だったのだが、札幌市からこの土地に公園を作りたいという要望があり、できた。その際に「障がいのある子もない子も共にふれあう場になるように」という柴川さんの要望に対して担当の札幌市職員が共感し、協力的に公園作りがされた。その後、地域の方々が参加してのワークショップなどを通して、公園から段差をなくすことや、車椅子の人でも遊ぶことのできる遊具を設置するなどの要望が通り、現在でも札幌市でも数少ないバリアフリーの公園の一つとなっている。現在では緑に溢れ、多くの遊具があるこの公園だが、この公園ができるまでにはワークショップ「むくどりの会」に参加した地域の住

民や子どもたち、ボランティアや障がい児教育にかかわる先生方、福祉を学ぶ主婦、行政、施行者などの総勢57名の方々の支えがあった。

「少しでも多くの人々が訪れ、多くの友だちを作ることができたら良い。そして同じような施設がもっと増えてほしい」と最後に柴川さんは話してくれた。

(文・写真:平田拓巳)■



バリアフリーの藤野むくどり公園



幅広い年齢層が訪れるむくどりホーム

## 定山溪温泉と修学旅行

～体験型学習で集客ねらう



国際スキー場でスキーを体験する修学旅行生(写真提供:札幌国際スキー場)

17.5%。これは日本全国の高等学校のうち、2008年に北海道に修学旅行にきた学校の割合だ。日本修学旅行協会のデータによれば、これは沖縄の28.5%、近畿の22%に次いで3番目に多い数字だ。同協会の調査では、京都・奈良を持つ近畿圏を除き、沖縄と北海道が人気のある理由として、地域の特性を活かした体験学習があることだという。同協会のデータによれば、体験学習を実施する学校は全国で86.9%と高く、前年より伸びている。

体験学習とは、実際に活動体験を通して学ぶことを狙った学習形態のことで、ボランティア体験、自然体験、職場体験などが例として挙げられる。

北海道全体としても、地域の特性や歴史を活かした教育に使える旅行を売り込もうとしていて、「北海道体験観光推進協

議会」という組織があり「北海道教育旅行サイト」を運営している。実際に修学旅行のモデルコースを作成し、旅行会社と協力し、修学旅行生を受け入れている。同協議会によると、7、8年前から体験学習をリクエストする学校が増えてきたという。モデルコースでは、夏はカヌー、ラフティング、乗馬や登山、冬は、スキー、歩くスキーやスノーラフティングといった自然体験に加え、農業、漁業、牧場、果樹園といった道内の農林水産業の職場体験が紹介されている。

南区では、定山溪地区が多く修学旅行生を受け入れており、その歴史は長い。北海道観光ブームが訪れた昭和30年代から、修学旅行生は多く訪れていた。昭和50年代後半から冬の修学旅行が飛躍的に伸び、春秋の修学旅行生は徐々に減ってき

ている。同協会が入湯税から分析した修学旅行客入込調査によれば、ここ数年、1月の入り込みが最も多く平均1万人以上を記録しているのに対し、次に多いのが10月でその約半分、修学旅行シーズンといわれる6月は1月に比べると2～3割の入り込みとなっている。同協会ではその原因の一つとして、体験を売りにしている道内他地域に客を取られているのではないかと分析している。

冬はなんといってもウィンタースポーツの体験学習が盛んだ。同協会の橘真哉さんの話では「札幌国際スキー場でのスキー体験が一番多い」という。同スキー場と定山溪地区の6つのホテルは「定山溪修学旅行誘致委員会」を組織し、積極的に受け入れを行っている。同スキー場の修学旅行生の2日コースでは、2日間にかけて、スキーの基礎を教え、5°～10°の斜面を滑るところまで指導をしている。同スキー場によれば、「今シーズンは九州の修学旅行生が多かった」という。

「昨シーズンは小樽～定山溪間のトンネルひび割れの影響があり、大打撃を受けたが、今シーズンは好調だった」と、橘さんは話す。

春のシーズンも、定山溪地区ではカヌー、散策と自然を活かした体験ができるし、八剣山地区では乗馬で動物と触れ合う事ができ、体験学習の可能性は多くある。しかし、「あまり知られていない」と橘さんは言う。

そこで定山溪地区では修学旅行生をはじめ多くの人に、資源の豊富さ、札幌中心部からバスで50分の利便性など、定山溪の良さを知ってもらおうとしている。定山溪観光協会を中心に、これまでの修学旅行向けのスキーを中心とした冬用パンフレットから、夏のプログラムも加えた通年で使えるパンフレットの制作を計画中で、春シーズンの集客に向けて取り組みを始めている。

(文:横山和明)■

### 編集後記

実験号として続けて、3号目を出すことができました。前号まで活躍してくれていた学生諸君は全員無事卒業し、書き手のメンバーが少し少なくなったため、今回は少し小ぶりです。

もう少し早く発行予定でしたが、3月11日の震災により編集作業が中断し、大幅に遅れてしまいました。このたびの地震で被災された皆様には心からお見舞い申し上げます。

震災直後から、神奈川にある大学のメインキャンパスとの間で、卒業式や入学式を間近に控えての対応に追われたことでもあります。それに加えてあの日以来精神的にも大変落ち込み、創作意欲が全く

わかなくなり、編集作業に着手できない状況が長く続きました。いつまでもメソメソしていてもしょうがない、と気持ちを入れ替え前に進みます。

不定期刊行、いつまでできるかわかりませんが、しばしは実験号のまま進んでいきたいと思えます。近々またお目にかかれまことを。

(担当教員・吉村卓也)

発行：東海大学地域連携研究グループ  
SAN(サウスエリアネットワーク)  
〒005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目  
東海大学国際文化学部地域創造学科  
吉村研究室内  
011-571-5111(代表)  
san-news@htokai.com